第４回　公開講座

ヨーロッパ史におけるフランス革命の諸条件

リラ・ムカジー（翻訳：川口　智江）

１．導入

私の講演タイトルを御覧になればわかるように、フランス革命に至る原因や事件についてのみここで話すわけではありません。従って私は革命の原因・事件・結果について余すところなく書いてきたフュレ（Furet）、オズーフ（Ozouf）、ハント（Hunt）、その他の主要かつ著名なフランス革命研究者たちについて言及するつもりはありません。

今回の私の関心は少し異なるところにあります。ここでお話しするのは、「ヨーロッパ史における」フランス革命の前提条件についてです。言い換えるならば、フランス革命を可能にしたある種の傾向がヨーロッパ史にあったのか。そしてもしある種の傾向があったとするならば、なぜこの革命がフランスで起きて他のヨーロッパ諸国で起こらなかったのか、という疑問です。これらが私の講演でこれから議論する問題になります。私の講演は4つに分けられます。第一に、ヨーロッパ内の長期的諸条件。第二に、フランス国内の長期的諸条件。第三に、フランス国内の諸条件。第四に、フランス国内の偶発的な事件です。講演を4つに分けることによって、私は、フランス革命へと導かれた条件が一組ではなかったということを示したいのです。実際、この4つは全く異なる諸条件を生み出し、その結果も様々でありえたわけです。

この報告にふたつ付け足すことがあります。ひとつには、フランス革命が多くの点で未完の革命であったことを示すための分析です。そしてもうひとつは、なぜ革命が他のどこでもなくフランスで起きたのか、ということを明らかにするための分析です。

最終的に私が主張するのは、革命の直接的な前触れである啓蒙思想によって引き起こされた道徳の危機が、フランスにおける革命の最も重要な、唯一の前提条件だったということです。

２．諸条件と諸要因

２．１．ヨーロッパ内の長期的諸条件

最初に、諸条件と諸要因についてです。ヨーロッパ内の長期的諸条件といたしまして、長期的持続（longue durée）という概念を提唱したブローデルは確かにフランス革命研究者ではないも

のの、長期的な意味でヨーロッパに革命的状況を導いたある種の傾向について述べています[1]。その傾向とは次のようなものでした。

・1791～1817年にヨーロッパでは物価高騰が生じた。
・16～18世紀に三つの革命が起きた。すなわち、a)科学革命、b)知的革命、c)生物学的革命[2]。
・「1750年頃、世界は文明の多様性にもかかわらず、一連の大変動、つまり破局の連鎖を経験した」[3]。

したがってこれらの諸傾向は、経済的、知的／文化的、そして社会的なものです。

2．2．フランス国内の長期的諸条件

次に、フランス国内の長期的諸条件についてお話しします。ラインハルト・コゼレックは、啓蒙思想によって引き起こされた特殊な危機状況の中に革命を位置づけています[4]。コゼレックの主張によると、政治から倫理を切り離した絶対主義的試みは政治に抽象的な空間を創り出しました。このことは啓蒙主義によってひっくり返されました。啓蒙主義は社会に良心という考えを取り入れることによって、再度政治に倫理を取り戻したのです。このような政治と倫理・道徳との関連は危機意識を生み出し、かつフランス革命勃発の本質的な要因となりました。

フランス国内について、ブローデルは革命を可能にした二つの傾向を次のように考えています。

第一に、啓蒙主義から芽生えた文明意識のはじまりです。このことが最初に出版物として現れたのは1766年で、マブリ（Mably）は野蛮な国民（すなわちスウェーデン、ロシア）について話すためにその言葉を用いました。そしてコンドルセは1787年という革命のまさに直前に「文明が地球上でさらに拡大すればするほど、一層多くの文明は戦争・征服・奴隷・貧困を無くしていくだろう」[5]と、予言していました。これとコゼレックの主張を結びつけることはできるでしょうか。政治は進歩という重要なプロジェクトの一部となりうるのでしょうか。

第二に、18世紀、フランスの経済は貿易量が増加したにもかかわらず地中海から離れ、大西洋へと向かいました[6]。これはなぜでしょうか。研究していく必要があります。この大西洋への新たな展開は、フランスの欲望を示していました。つまりイギリスは（そしてオランダもそうですが）、新しい大西洋経済からかなりの利益を得ており、フランスもその分け前に預かりたかったわけです。結局、フランスはこの貿易に失敗しました。しかしこの展開は、例えば新しい道路、新しい街、新しい経済・貿易の様式、新しい制度といった経済や空間の全体的な再編成をもたらしたのです。そしてとりわけ新しい考え方が必要になりました。

マイケル・マンは『ソーシャルパワー』[7]の中で次のように述べています。新しいネットワークの登場は、都市・コルポラシオン・ギルド・商人のような新しい社会勢力の結集を生み出しました。言い換えるなら、市民社会のはじまりです。これらの新しい社会勢力は確立しているヘゲモニーを変えることができました。18世紀のフランス社会はますます三つの階級に分割されていました。すなわち、少数の貴族。彼らは特権と絶対的政治権力を享受しました。それから、成

長しつつある中産階級。彼らは政治的権力を持たないために、だんだんと不満を募らせていきました。そして、貧困な農民がいました。彼らは十分な土地を持たず、一連の不作に影響を受け、いよいよ反封建的な感情を持つようになりました。農民は封建貴族に税を支払わねばならず、封建的義務にさらに影響を受けました。反封建的・反貴族的感情が成長していったのです。

これらの傾向は知的・経済的・文化的・社会的なものです。

2．3．フランスにおける革命の諸条件

フランスにおける革命の諸条件でありますが、新しく登場したナショナリズムは君主制支配に適合しませんでした。ロイド・クレーマーは、フランス革命に国民思想のはじまりを見ています[8]。すなわちクレーマーは次のように述べています。「フランス革命は[･･･]国民国家や国民文化という集団的アイデンティティと個々人のアイデンティティを融合させた」。しかしながら、ビッグス（Biggs）[9]とサーリンズ（Sahlins）[10]の研究がクレーマーの意見に異議を申し立てました。彼らは、18世紀までに、つまり革命前にすでに、王国は領域国家（the territorial state）に変化していたと指摘しています。ひとつの国民であるという明確なフランス人意識がここに登場してきました。ビッグスによると、カッシーニ（Cassini）計画によって1789年までにフランスの大量の地図が作られました[11]。これは180枚にもおよびます。憲法制定国民議会がフランスの領土をdepartments（県）、communes（市町村）、cantons（小郡）へと再区分した際に、シエイエスは1789年のカッシーニの地図を引用しました。サーリンズはフランス（すなわちガリア人）の国民的アイデンティティの発展が見られるのは、実際は17世紀であるとしています[12]。フランスとスペインの間にあるピレネー山脈、フランスとイタリアの間にあるアルプス山脈と、4本の川すなわちソーヌ川、ローヌ川、ムーズ川、シェルト川がフランスの空間を取り囲んでいると考える、リシュリューとマザランの時代の古いフランス意識は、さらに磨きをかけられ、革命まで続きました。ルソーもモンテスキューもフランス国家を自然国境が取り囲んでいる、という理論を信じていたのです。

その他、フランスにおける革命の諸条件としては、次のようなものが挙げられるでしょう。

・国家の威信の喪失：ルイ15世の時代（1710～74年）に、王家の威信はイギリスとの惨憺たる戦争で傷つけられました。
・経済的不況：フランス政府の経済は衰退しました。負債状況があったのです。政府は借金をし、経済危機はさらに深刻化しました。エルネスト・ラブルース（Ernest Labrousse）は、1774から1791年にかけての全国的な不況をフランス革命の重要な契機のひとつであると鋭く指摘しました[13]。
・民主主義の矛盾。すなわち、アメリカ独立戦争の際にフランス政府がアメリカの植民地を支援したことは矛盾しているように思われました。アメリカ独立革命は両国の違いを大きなものにしました。アメリカは自由と民主主義の思想によって統治され、フランスは抑圧と特権によって統治されていたのです。

これらの傾向は初期ナショナリズム、経済的不況、政治的権利の要求を生みました。

2．4．フランス革命の偶発的要因あるいは直接的要因

それから、フランス革命の偶発的要因あるいは直接的要因についてお話しします。この点につきましては、みなさんすでに全部ご存知かも分かりませんが、手短におさらいをしておきます。革命の偶発的要因あるいは直接的要因は次の通りです。

・経済的要因：フランス政府は経済的に破綻したとき、貴族に課税することによって収入を増やそうとしました。これが失敗すると、1789年には、1614年以来開かれていなかった全国三部会を召集せざるを得ませんでした。第三身分の怒りは、他のふたつの身分である貴族と聖職者に向けられました。第三身分とは、一般的にはブルジョアジーと中産階級です。1789年6月17日、第三身分は新しい憲法を起草するために国民議会を宣言しました。
・社会不安：この反貴族感情は1788年の不作によって悪化し、農民と都市労働者は飢餓に陥りました。フランスの多くの都市で騒擾が発生しました。こうしていまや二つの階級、すなわち中産階級と農民・労働者階級が反貴族勢力を形成したのです。
・政治的要因：1789年7月11日、ルイ16世（1754-93）は民衆に人気のあった大臣ネッケルを罷免しました。これが暴動の合図になりました。1789年7月14日、パリの民衆はバスティーユ監獄へ押しかけました。バスティーユ監獄は、アンシァン・レジームと呼ばれている古い貴族の政治体制の象徴でした。国民議会は王家・貴族・聖職者の特権を剥奪しました。国王はヴェルサイユすなわち絶対主義の玉座から、パリへとひき戻されました。
・国際的要因：オーストリア皇帝とプロイセン国王に助けを求める国王ルイの呼びかけは、国王に対する民衆の憎しみを増幅させ、彼は1793年に処刑されました。

すなわち、フランス革命には、経済的、社会的、政治的要因があったということになります。

3．分析

従来言われてきたフランス革命の成果を取り上げ、どの程度それらが諸条件の結果であったのかを見ていくことにします。従来の主張では、フランス革命は近代化の概念をあらゆる生活領域に持ち込んだとされてきました。そしてフランス革命は臣民から市民への変化を強調することによって、中世から近代へのヨーロッパの発展を強めたと一般的に信じられているわけです[14]。憲法を再構築の道具として使うことによって、フランス革命の理念はヨーロッパに近代国家の基礎を築いてきました。フランス革命の理念とは、すなわち次のようなものでした。

・市民権という道具による万人の平等の確立。これは、人間および市民の権利の宣言というタイトルが付された憲法の前文で謳われています。
・封建制の廃止。
・教会権力の抑制。
・教会財産の整理。これが意味したのはフランスにおける最大の土地所有者集団の消滅でした。
・領主の封建的土地所有の解体および全ての土地の自由保有地、借地、分益小作地への転換。

・長子相続制の廃止および穀物と塩の国内における自由取引の導入。

これらの変化はフランス革命当時、革命的だと思われていました。

また革命は以下のことを示しました。リン・ハントの言う新しい政治文化の到来です[15]。フランス革命の主な成果は劇的に新しい政治文化を生み出したことでした。フランス革命によって確立したのは、民主主義的共和主義の潜在的な動員力と、革命的変化の激烈な強さでした。さらに革命は新しい政治的レトリックを創り出し、いまや政治は社会を再形成するための道具となりうることが認識されました。大衆プロパガンダの技術、大衆の政治的動員、日常生活の政治化はすべてフランス国家再生に利用されました。フランス人は革命を通じて新しい国民共同体を確立することができると信じました。

このことは、トゥレーヌ（Touraine）[16]、ロザンヴァロン（Rosanvallon）、ウォーラーステイン（Wallerstein）に反駁されました。トゥレーヌは、革命が生活の中心的要素として理性を強調したことは民主主義の潜在能力を破壊し、結果的に恐怖政治に陥ったと主張しています。ロザンヴァロンは革命の中に、19世紀にようやく調和することになる個人主義と集団的意志すなわち一般意志の間の緊張関係を見ています[17]。また、ウォーラーステインは革命の中に自由主義と民主主義の間の緊張関係を見て取りました。彼は市民というカテゴリーが多くの人々を排除したと述べています[18]。

従来、革命は資本主義的発展と政治的近代化の基礎を築いたと信じられてきました。しかし私たちは、フランス革命が経済成長や政治的安定にはほとんど貢献しなかったこともまた忘れてはなりません。

実際、革命はまず第一に、国家の近代化の必要性を示しました。シーダ・スコッチポル（Theda Skocpol）の国家と社会革命のモデルは、フランス国家の政治的近代化が時代の要請であったという事実を強調しています[19]。フランスの君主制は、イギリスとの競争にかかる費用を捻出できなくなったために崩壊しました。アメリカ独立戦争はフランスの国庫にとって負担が多すぎました。フランス国王は巨大な負債を重ね、その債権者だった商人、銀行家、金融業者、投機家たちは政治参加の拡大を要求しました。

当時フランスがヨーロッパの指導国としての立場を保持する場合には、よりよい社会的状況を実現するために、政治の近代化、資源の効果的供給、生産性の向上、過酷な課税からの解放が必要でした。これらがなかったということは、革命中に激しい資源獲得競争が行われたという事実によって示されています。フランス革命をイギリスやアメリカの革命と分けているものは、旧体制のエリート間における激しい競争でした。古い貴族と新しい貴族の間の対抗はとりわけ激しかったのです。結果的にカーストのような境界線が古い貴族とブルジョアジーの間に築かれました。それゆえに真の民主主義革命は達成されませんでした。

これは革命が階級的土台を持たなかったという事実によって証明されています。より正確には、フランス革命は幅広い階級的土台をもっていましたが、しかし革命的理念を前進させる特定の階級があったわけではないということを忘れてはなりません。様々な場面で、様々な階級が革命の勢いを前進させました。それはあるときは貴族であり、またあるときはブルジョアジーであり、

農民、都市労働者、あるいは無視できない革命勢力として登場した女性でした。

実際、このようなフランス革命における階級的な特性の分裂によって、革命の理想に終止符がうたれ、フランス革命の急進的なプログラムは1793年の恐怖政治支配、さらには革命戦争へと陥り、最終的に1798年のナポレオンの登場とそれに続く統領政府と帝国の設立で頂点に達しました。それ以降、フランス革命の遺物は、自由主義と民主主義の緊張関係とウォーラーステインは言っており、トゥレーヌとロザンヴァロンは個人主義と集団主義の緊張関係と言っています。あるいはまた、改革を目指すフランス国民国家それ自体の失敗でした。トクヴィルによると、古い中央集権的構造は保持され、それゆえアンシァン・レジームの国家から革命期の国家を分けることは、ほとんどできなかったのです[20]。

4．なぜ革命は他の国で起こらなかったのか？

それでは、なぜ革命は他の国で起こらなかったのかという話に入ります。これまでのところ、今日の講演を通じて、フランス革命の色々な原因、あるいはその前提条件ということを話しました。様々な前提条件、原因がありました。長期的な原因も短期的・直接的な原因も、ヨーロッパの文脈、あるいはフランスの文脈の中にありました。そしてなぜ革命は他の国で起こらなかったのかという部分について、少し推論的にはなりますが私の考えをお話しします。他の国ではなくフランスでこの革命が起こった要因は、経済的衰退、物価上昇、封建的徴税、議会設立の要求など、いろいろありましたが、特に都市化の問題があります。18世紀になると工場がたくさん建てられました。これは単にパリだけではなく、ベルリン、モスクワなどの都市も同様でした。当時の都市というのはある種非常にひどい生活状況でもあり、さらに経済が衰退してきたという状況もありました。以上のように、経済的衰退、物価上昇、封建的徴税、議会設立の要求、政治的な代表等の要求といった、革命の諸条件の多くは他のヨーロッパ諸国でも見られるものであったということを私たちは確認してきました。そして今、なぜ革命がフランスで起きたのかということを問わねばなりません。そこで私はもう一度コゼレックの議論にもどろうかと思います。コゼレックの議論は大変興味深いと思っています。

1648年のウェストファリア条約と、それに続く絶対主義的試みは、フランスにおいて政治から倫理を引き離しました。その結果、政治が道徳的に自律している領域、つまり社会とは別の、通常は君主あるいは国家のうちに体現された空間を占領したわけです。例えば国王の死の場合を除いて、政治の領域に危機はありえませんでした。しかしながら啓蒙主義の実践は良心を政治的領域へ戻しました。社会は重要かつ政治的な影響力を持つものとなりました。それと同時に啓蒙主義のプロジェクトは国家と社会を分離させました。これが市民社会という自律的な領域を生み出したのです。そして、この市民社会は天国（City of God）にも国家にも対立するものとなりました。このことは想像の上で、あるいは人々の心の中で、様々な危機に道を開きました。そして政治的正当性に異議を唱えることを可能にし、実際にそれを行ったのです[21]。

事実、啓蒙主義の時代になりますと、政治が必ずしも自律的な領域を占領するということは無くなってきました。すなわち、政治が社会の一部になってきたということです。どんなことでも

危機になりうるという状況になってきました。例えば、国王がズボンの色を変えただけでも政治化される、政治的問題になるというふうになってきたわけです。ということで、全てがこの時代には政治的にとらえられるというふうになってきたわけです。シリネッリ（Sirinelli）によると、社会は理性の行使と国民の意志を通じて、進歩の原理に従い自らを集団としてまとめていけるかどうかという問題に対する答えを見つけること、あるいは社会が君主制から生じる政治的領域に従属し続けるべきか、という問題に対する答えを見つけることが革命の全課題でした[22]。言い換えると、ふたつの異なる見解、つまり絶対主義的政治理念と啓蒙主義的政治理念が革命を支配していたわけです。

さらにコゼレックが別のところで書いているように、時間はここでは重要な問題になります。かつて、歴史は偉大な仲裁者とみなされ、あらゆる教訓を歴史から引き出すことができました。しかしそれが、革命によって、いまやただ過去と不安定な現在と不確定な未来があるだけとなりました[23]。1789年はこの意味でひとつの断絶であったと言えます[24]。そして、革命が起きたということは、ある種の新しい暦に移行したと言えます。これは、この革命に限らず、他の社会的・政治的な運動、あるいは千年王国論的な運動などにも同じことが言えると思います。革命には過去の時間の上に新しい時間感覚が上書きされていくといった側面があります。従って、時間的感覚から何か新しいものが生まれてくるわけです。これは単にフランス革命だけに限らず、ルネッサンスにおいてもそうでした。しかし、フランス革命において、このことは非常に顕著に出ていたと言えます。また、全く新しい形で時間が書き換えられたというようにも言えます。そして、ある種革命というのは過去を拒否する部分があり、過去からは何も学ぶべき教訓はないのだといった部分もあると思います。その意味で1789年はひとつの分断、断絶の時であったと言えると思います。

コゼレックについて申し上げますと、やはりコゼレックの考え方、というのは先ほど言いました時間の考え方と言うよりはむしろこの差し迫った危機感という意味での考え方でありますが、これが非常に重要だと思います。すなわち、差し迫った危機感というのは、フランス革命における恐らく最も重要な前提条件ではないかと私は考えております。そしてまた差し迫った危機感ということと同時に、解決策が無いことへの不安というものもそこにはあったと思います。コゼレックの意見はシリネッリやヴィーニュ（Vigne）に支持されました。そして、道徳的領域における不確定性と不安定性はフランス革命の本質的な前提でした。国家と社会の分離が危機を招いたのです。こうしたことにすでに述べた偶発的な理由を加えると、革命が他のどこでもなくフランスで起きたという事実はそれほど驚くことではなくなるということが言えると思います。

註

（1） Fernand Braudel, *On History,* (Tr.) Sarah Matthews, (University of Chicago Press, 1980), 29.

（2） Ibid, 214.

（3） Ibid, 214.

（4） Reinhardt Koselleck, *Critique and Crisis: Enlightenment and the Pathogenesis of*

Modern Society (MIT Press, 1988).

(5) Braudel, 180-81.

(6) Ibid, 87.

(7) Michael Mann, *Sources of Social Power,* V.2 (Cambridge, 1993). 第6章 'The French Revolution and the Bourgeois Nation'を参照。

(8) Lloyd Kramer, "The French Revolution and the Emergence of Modern Nationalism", *Center for Historical Studies Annual Report,* No.3, Senshu University, (Tokyo, 2006).を参照。

(9) Michael Biggs,"Putting the State on the Map: Cartography, Territory and European State Formation", *Comparative Studies in Society and History,* (1999).

(10) Peter Sahlins,"Natural Frontiers Revisited: France's Boundaries Since the Seventeenth Century", *American Historical Review,* 95 (1990), 5.

(11) Biggs, 383-4.

(12) Richlieu, *Political Testament.*

(13) Ernest Labrousse, *Esquisse du mouvement des prix et des revenus en France au XVIIIe siècle,* 2 vols, (Paris, 1933).

(14) これは最近ウォーラーステインとロザンヴァロンに反論されている。Immanuel Wallerstein, "Citizens All? Citizens Some! The Making of the Citizen", *Comparative Studies in Society and History,* xlv, 4.(2003)を参照。さらに、Wallerstein "Liberalism and Democracy: Frères Ennemis?" (Fourth Daalder Lecture, Rijksuniversiteit Leiden, Interfacultaire Vakgroep Politieke Wetenschappen, March 15, 1997).を参照。Pierre Rosanvallonの3巻本を参照。*Le Sacre du Citoyen: Histoire du Suffrage Universel en France* (Paris, Gallimard, 1992), *Le Peuple Introuvable: Histoire de la Représentation Démocratique en France* (Paris, Gallimard, 1998) and *La Démocratie Inachevée: Histoire de la Souveraineté du Peuple en France* (Paris, Gallimard, 2000)を参照。また、Andrew JainchillとSamuen Moynの書評 'French Democracy Between Totalitarianism and Solidarity: Pierre Rosanvallon and Revisionist Historiography', *Journal Of Modern History* 76, (March 2004), 107-154も参照。最後に、Rila Mukherjee,"The Bernstein Collection at Senshu University Tokyo", *Indian Historical Review,* July 2005 issue, V.32, No.2とRila Mukherjee,"The Importance of the Bernstein Collection of Senshu University, Tokyo", *Jadavpur University Journal of History,* (2006)も参照。

(15) Lynn A.Hunt, *Politics, Culture and Class in the French Revolution,* (1984).

(16) Alain Touraine, *Critique of Modernity,* (Cambridge, 1995).

(17) Rosanvallon, op.cit.

(18) Wallerstein, op.cit.

(19) Theda Skocpol, *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China,* (New York, 1979).

(20) Alexis de Tocqueville, *L'Ancien Régime et la Révolution,* (1856).

(21) Koselleck, op. cit.

(22) Jean François Sirinelli and others, *Histoire des Droits en France,* V.1 Politique, (Paris, Gallimard, 1992), xiii. この議論は革命を通じて続けられた。Sirinelli et al: xiv, xxxix, xl.を参照。

(23) Koselleck, *Futures Past,* (MIT Press, 1991). Richard Terdiman, *Present Past: Modernity and the Memory Crisis,* (Ithaca/London, Cornell University Press, 1993). も参照。

(24) Sirinelli: xxxvii.